

【フロンティアスクールの取組事例様式】

(様式2)

都道府県番号	38
都道府県名	愛媛県

()

・学校名及び規模

松山市立道後小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	4	4	4	4	4	4	0	24	36	
児童数	113	115	122	130	121	143	0	744		

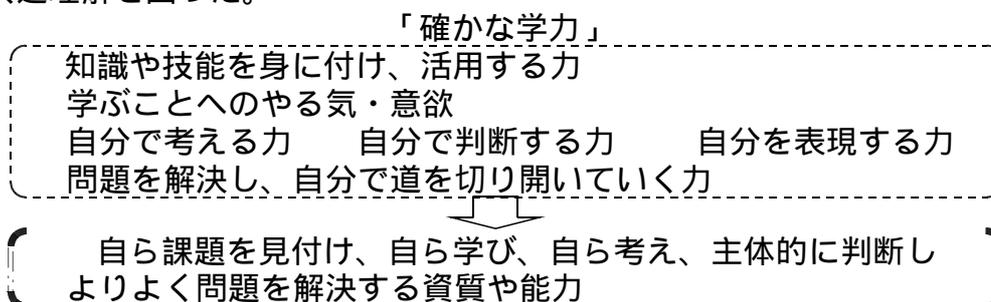
・実践研究の概要(主題(テーマ)及び設定の趣旨)

<p>・主題(テーマ) 豊かなかかわりの中で、共に学ぶ子の育成 - 個に応じたきめ細かな指導を通して -</p> <p>・テーマ設定の趣旨 本校は、転出入児童が多く、幅広く交友関係をもてる反面、長期にわたって人間関係を築くことが難しいという実態がある。そのため心からかわり合うことができず、表面的なつきあい方をせざるをえないという状況も見受けられる。 学習においても、興味をもったことには大変意欲的に取り組むが、全体的に受け身で、自分の考えを進んで発表したり練り合い高め合ったりするなど友達とかかわり合いながらお互いに伸びていこうとする意識が弱い。 このような児童の実態から、本校の教育目標「共に生きる元気な道後の子の育成」のもと、「確かな学力」を子どもたちが共に身に付けていく指導の在り方について研究・実践を積み重ねていきたいと考え、研究主題「豊かなかかわりの中で、共に学ぶ子の育成」を設定した。</p>

・実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

まず、「確かな学力」をどうとらえるかについて話し合い、下のように共通理解を図った。



この「確かな学力」を向上させるには、全教師の共通理解のもと指導に取り組むことが大切となる。そこで、研究の第一年次である本年度は、算数科にしばって研究を進め、第二・三年次には、その成果を他教科等へと発展させていく研究推進計画を立てた。

算数科の研究テーマ ~ 第一年次 ~

算数的活動を通して、考える力を育てる指導の工夫

研究の視点

考える力を伸ばすための算数的活動の充実
 数学的なコミュニケーション能力を高めるための集団思考の場の充実
 指導と評価の一体化

() 実践研究の内容

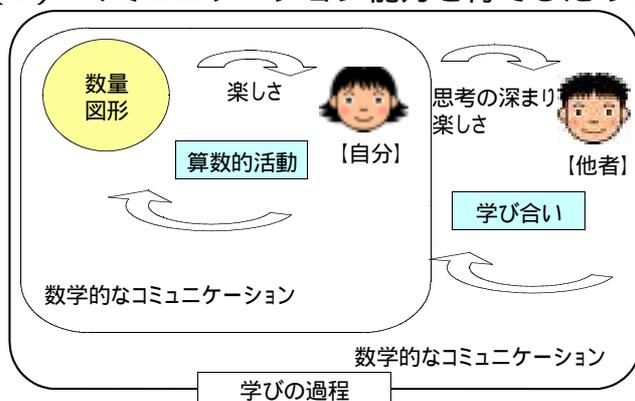
(1) 個に応じた指導のための学習形態の工夫

5・6年生に加配教員が1名ずつ入り、T・Tや少人数指導を行った。
 今年度、取り組んだ方法は次の通りである。

学習形態	概要
A 1クラスに2名の教師が入り、指導する。(T・T)	1学期の段階は、まず、学級担任が児童の実態をより多面的に把握することに重点を置きたいため、この方法が効果的だった。
B 1クラスを出席番号によって、2グループに分けて指導する。(少人数)	A形態からC形態への移行段階に行った。少人数になることで、教師が児童全員にかかわることができるようになった。また、発表が苦手だった児童が発表するようになるなどの効果もあった。
C 1クラスを児童の希望によって2コース「チャレンジコース・じっくり(確実)コース」に分けて指導する。(少人数)	B形態の効果の上に、さらに個人差(理解度・学習速度等)に応じた指導ができるようになった。単元ごとに児童がコースを選択できるようにしており、アンケートによると、ほとんどの児童がこのC形態を好んでいた。

加配教員の入っていない学年でも、単元によっては学級解体によるコース別学習(学年T・T)を行い、個に応じた指導形態を試みている。

(2) コミュニケーション能力を育てるための指導の工夫



本校の研究主題にある「豊かなかわり」とは、児童の学習内容への働きかけと他者とのかわりの両方が機能している状態ととらえている。つまり、児童が主体的に課題解決に取り組み、他者とかかわりながら自分の考えを深めていく過程を積み重ねることにより、一人一人のコミュニケーション能力が高まると同時に「確かな学力」が向上していくものと考えている。

自力解決の場(数学的なコミュニケーション)の保障

児童の学習内容への働きかけについては、まず、上に述べたように効果的な算数的活動を積極的に取り入れた。また、自力解決の時間を確保し、児童一人一人が自分なりの考えをもち、具体的な操作をしたり、それを絵や図や式に表したりすることができるようにした。

集団解決の場(数学的なコミュニケーション)の充実

・ 情報交換の場の設定

他者とかかわりの場を通して、自力解決のあとに情報交換の場と時間を十分に保障した。席を立って自由に相手を見付け、お互いの考えを紹介し合うものである。それによって各自が自分の考えを確かめたり広げたりすることができるなど個人差への対応の点でも効果的だった。

・ ホワイトボードの活用



多様な解決方法を個人やグループでホワイトボードにかかせ、全体の練り合いの場での説明に活用した。ホワイトボードは、児童が視覚でとらえながら話し合いができる上に、移動や取り外しが容易なため、いろいろな考えを比較・分類したりまとめたりすることができるなど、話し合いを深める点で効果的だった。

() 成果と課題

学習形態の工夫

- ・ 1クラスを2つに分ける少人数によるコース別学習（確実コース・チャレンジコース）により、教師が児童一人一人にきめ細かなかわりができるようになり、今まで見落としがちだったつまづきを発見し、個に応じた指導ができるようになった。ほとんどの児童が少人数によるコース別学習を好んでおり、自分にあった学習環境で存分に力を発揮する姿が見られるようになってきた。特に、算数に苦手意識をもっていた児童が、意欲的に発表するなど目を輝かせて活動するようになってきた。さらには、少人数指導ではない他教科の学習でも意欲的に発表するようになるなど学習意欲の向上という点でも効果的である。
- ・ 児童から「もう1コース増やしてほしい」という要望も出てきている。さらに個に応じた指導ができるよう学級解体によるコース分けも考えたが、現在の教員数で日常化させることを考えると難しい。今後、それに代わるより個人差に応じた指導の手だて等を工夫していく必要がある。
- ・ 加配教員のいない学年では少人数によるコース別学習はできないが、学級解体によるコース別学習（学年T・T）を取り入れるなど、今まで以上に個に応じた指導の工夫がなされるようになってきた。

数学的コミュニケーション能力の育成

自力解決のあとに情報交換の場を設定したり全体の練り合いの場で自分の考えを聞いたホワイトボードを活用したりすることにより、自分の考えを自信をもって進んで発表し合う姿が見られるようになってきた。また、算数科だけでなく、自分の思いや願いを相手により分かりやすく伝えたり相手のよさを進んで取り入れたりする力が他教科における学習でも見られるようになってきている。

研究体制

研究の第1年次ということで、研究教科を算数科にしぼったことにより、全教師の共通理解が図られやすく、学年部を中心として学校が一体となって研究を進めることができた。今後は、算数科の研究をさらに深めると同時に、その研究成果を他教科等へも広げていく方向で一層研究を進めていきたい。

() 成果の普及方策

研究発表会（公開授業）

平成14年12月10日 松山市立道後小学校

テーマ 豊かなかわりの中で、共に学ぶ子の育成

- 個に応じたきめ細かな指導を通して -

参加者 約198名

HP作成（<http://www.matsuyama-edu.ed.jp/~s.dougo>）